

# 平成30年度新宿区夏目漱石コンクール わたしの漱石、わたしの一行

## 高校生の部 最優秀賞

静かな強さ

大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎 2年 八木 乃莉子

### 作品名『こころ』

選んだ一行 考えると女は可哀そうなものですね。私の妻などは私より外にまるで頼りにするものがないんだから。

女の人は強い。私はこの物語を読んで強くそう感じた。先生の奥さんは、台詞は少ないが、誰よりも人間らしさや、静かな強さを感じさせる。

私は、先生が苦手だ。先生はすぐに理屈だの自分が信用できないだのと、ごたごた言っているが、私には、先生は自分しか愛してないただのナルシストのように見える。主人公との会話の時にも、さも悲惨な人生を送ってきたかの様に言葉の節々に悲壮感を出してる。先生の遺書にいたっては、男や女の人など他人を見下し、自己愛というエゴにどっぷりつかっている様子が目に見えて、読んでいるこちらが恥ずかしい気持ちになった。先生のやっていることは、理屈ばかり述べて賢そうに見せているが、とても稚拙に見える。奥さんは、そんな面倒くさい自己愛のかたまりの先生を受け入れ、愛しているのだから、すごい器の広さである。男の自殺の真相についても、私は、奥さんは、全てとは言わないが、ある程度、知っていたのではないかと思う。しかし、奥さんは、先生のようにペラペラと喋らず、自分の中にしまい、まるで知らなかったかのように、先生を愛し、受け入れている。奥さんはきつと、先生よりも恋愛の残酷さや、人の弱さを知っているのだ。それらを全て腹の中にしまい誰にも知られずに、静かに過ごしている様子から、女の人の強さを感じる。先生は、何かにつけ、女が可哀そうだの気の毒だのと言うが、私はそうは思わない。仮に、本当に奥さんを気の毒だと思うのなら、なぜ奥さんを残して自殺するのだと、叱咤したくなる。勝手に罪悪感に潰され、死を選ぶのは無責任である。本当に奥さんを愛しているのなら、罪悪感に潰されそうになっても、苦しみながらも必死に生きるべきである。奥さんは守ってもらうだけのような弱い人ではない。二人で頑張って生きるべきである。しかし、先生は「死」という道ににげってしまったので、弱い人である。

先生が亡くなった後、奥さんはどうなるのだろうか。先生しか頼りになる人がいない奥さんがとても不憫に思う。男や母や先生など身近な人が、全員亡くなってしまいうというあまりにつらい人生で、こちらが泣きたくなってしまふ。先生を追いかけて死んでしまうのではないかとも思われる。しかし、私は奥さんはきつと、女の強さや意地を見せて、たくましく生きていくのだろうと思う。いや、そうであってほしい。この物語の中で、一番の悲劇のヒロインであるにも関わらず、それらを感じさせない、堂々とした静かだがどこか芯がある、静の強さを持った奥さんは、やはり、言葉では言い表せない凄みがあると思った。